

---

# 事故にあった私は異世界にて

万華鏡

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

事故にあつた私は異世界にて

### 【Nコード】

N0164Z

### 【作者名】

万華鏡

### 【あらすじ】

事故に遇つて目覚めたと思つたら全く知らない場所にいた青羽。「シリアス・・・え、やっぱギャグ？でも、シリアスっぽい」な激しい展開です。

なんだかすごくウザったい魔法使いや世話係になった青年や、青羽を異世界に召喚した張本人のめっちゃ可愛い男の子たちと紡ぐ何がしたいのかよくわからなくなったストーリーー！！

皆さんこんにちは。私は青羽あおばと言います。

18歳です。めでたく高校卒業しました！！

無事就職先も決定し、就職祝いにキャンプしているところでした。

・・・でも、今ピンチです。ものすごく。

キイイイイイイっ！！！！

近づく車のブレーキ音。

それが、この距離じゃもう間に合わないだろうというところまで近づいてきていた。

・・・今は単独行動中なので、近くに知り合い等々はおらず。

ドカツ！！

何も抵抗することもできずに、あっけなく私ははねられた。

っていうかこれはないよね。うん、無い。あの車勢いよく走りすぎ。ただでさえ見渡し悪いのに、ほかに通行者がいなかったからって全速力で飛ばすことないよね。しかもどこ見て走ってるの。ちゃんと前は見なきゃ。

・・・まあ、左右確認せずに道路を渡ろうとした私も悪いんだけども。

このまま死ぬのかなーとか思いながら、宙を舞っている最中私は意識を飛ばした。

「ふああゝ．．．ねむい．．．？つて、なんで私無傷？むしろここ何処。」

そして、車に轢かれて意識を失っていたはずの私が目を覚まし倒れていた場所は．．．

森

だった。

．．．．．つて、よく考えてみれば森で轢かれたんだからおかしくはないのか．．．ん？でもなんで轢かれたんならまだ森にいるんだ？ここは普通病院とか．．．救急車とかじゃ．．．  
．．．もしかして私、捨てられた！？証拠隠滅か。そうなのか！？  
というよりむしろこの状況はそれしか考えられないしっ！！

「マジか．．．」

もうそんな言葉しか出てこない。

．．．い、いや。これはまだラッキーな方かもしれない。殺されなかっただけましだ！！とにかくまず助けを呼ぼう。近くに家は

ないいいい！！

当たり前じゃん、ここ森だし！え、何これ死ねって言うてんの？いやいやいや、待て。ここがさっき轢かれた森なんだとしたら誰か探

してくれてるかもしれないし、近くにキャンプとかで来ている人もいるかもしれない。とにかく人を探そう。

「って言っても・・・どこ見渡しても木しかないし。・・・まあ、森だから当たり前か。」

そう呟きながら立ち上がった時、コトンと何かが落ちる音がした。

「ん？・・・あ、ああ！！この手があったか！！」

それは現代人・・・しかも社会人ならだいたいの人は持っているであろう便利通信機、携かみさま帯電話。私の心の相棒である。とまあそんな冗談は置いといて、さっそく親の携帯に電話することにした。

・・・が。

「まさかの圏外・・・？」

泣きそうになった。いや、泣いてないけどね？私そんな弱い子じゃないからね。

とりあえず電話帳にあるすべての人達に片っ端から電話をかけてみたが、どれも圏外で駄目だった。なんで。ここが森だから？

「・・・。。泣いててもしょうがないか。」

そう、しょうがな・・・くはないような気がしなくてもないけど。泣いていたって何も始まらない。一步も歩けないような大けがしてるってわけでもないんだし・・・というか、あのスピードで車に轢かれたにしては如何せんこの無傷ぶりはおかしいくらい何もなし。とりあえず、寢床&助けを求めるために歩き回ることにした。

人を探し始めてから約15分。何処を歩いても、人影どころか生き物の気配一つしない。

運動神経抜群な私でもいい加減疲れてきた。というか、まず精神的に疲れてきた。

そんなこんなで、ちよつとしたホームシックかなんかに陥っていたら、急に視界が開けた。

「うわあ~~~~っ!!」

そこはまさにオアシス。とても透き通っていて綺麗な湖があった。家とかではなかったけど。今まで全く変わらなかった景色に変化が起こったのは、素直にうれしいと思う。

「せつかくだからちよつと休憩しようかな。」

少だけ前向きになれた私は、今の状況を少しの間だけでも忘れたくて、気分を少しでも紛らわせるように明るくその言葉を吐き出した。

湖の水に触れてみると、冷たすぎずかと言ってぬるすぎず。本当に適温と言っていていくらの温度だった。この湖を独り占めできるのはちよつと嬉しいかも。調子に乗った私は、周りに誰も人がいないことを確認してから、服を脱いで湖に浸かった。一人だからこそできる贅沢だ。今初めて少だけこの境遇に感謝してしまった。

・・・まあ、すぐに地獄に突き落とされることになったんだけど。

「気持ちい・・・」

何分が浸かっているうちに、ちょっとした感傷に浸ってしまつて。いつの間にか、目からは涙があふれていた。もう大人なのに情けない、と思いながらもやっぱりそれは止まることはなくどんどん溢れて零れていく。

そんな時、何処からか男の人の声が聞こえてきた。

「君、誰？そんなところで何してるの。」  
「え……………」

ひと。人だ。人間。

……………ということは私……………このまま野宿とかしなくて済む！？などこの状況では若干的外れなことを考えてしまった私。待て、落ち着け。……………今私、どんな格好してる？服何処にある？

答え……青年の足元。下着もろとも。

……………うつ……………。

「うぎゃああああつつつ！！？」

流れでいつの間にか近くにいた青年を殴ってしまったのはしょうがないことだと思う。ごめんよ青年。だがもつと空気を読んでほしかった。服足元にあつたの気づいてただろ。なんでそれでさらに近づいてくるんだよ。ありえないよ。

……………つてことで、もう少し落ち着く時間を下さい。

「・・・で、ゴメンナサイは？」

「御免なさいご免なさいごめんなさいゴメンナサイ・・・」

・・・ちよい前言撤回させてください。先ほど青年に心の中で謝ったのなかったことにしてください。こいつ最低な奴だった。碌でもないよ。なんで思いつきり殴ったはずなのに無傷なの。その上めっちゃ穏やかではない笑顔を浮かべていらっしやるおお怖い。

あ、因みにもう服は着たよ。当たり前だけどね。ってことで何とか落ち着いた私は、青年に泊めてもらうように頼むことにした。だってほかに人間・・・というか生物すらいないし。虫の一匹もないよ。虫は嫌いだからそこは喜ぶべきところなんだけど。

「・・・まあ、いいや。で、君はなんなの。なんでこんなところにいるの。」

そこは疑問形で語尾が上がるはずなのに上がっていない青年。え、ここ答えるところ・・・だよ。そう思った私は、丁寧に答えて差し上げた。

「私は青羽と申すです。（多分）証拠隠滅の為此の森に捨てられました。」

因みに口調がコレなのはちょっとした反抗心が働いただけだと思ってください。そして華麗にスルーして下さったら尚嬉しいです。常識人な私は言っていてちよつと恥ずかしくなってきたしまいましたので。

「家は？」



「日本です。」

「・・・どこそこ。」

「は？」

何言っちゃってんのこの人。ちよつと冗談で言っただけなのに。だってここ日本でしょ？ちよつとしたツツコミ待ってたのになんてあんたがボケんの？日本だよ。私日本語喋っててそれこの青年にも通じてるもんね？むしろそうだと言ってくれ。・・・すごく。すごおゝく、嫌な予感。これ、何フラグですか？

「えーつとお・・・念のため聞いておきますが、ここ何処ですか？」  
「森だけど。」

「いやそれはわかってんですよ。地名とか国名とか聞いてんですよ。」

「君が何言ってるのか分からないんだけど。」

「・・・ええゝ・・・？」

どういうことだ。もし・・・もしも、ここが日本でなくとも、少なからずどの国や世界にも国名や地名はあるはずだ。・・・あ、そうか。この青年がおかしいだけだ、これは。何かの病気かな、可哀想にゝ。まあそれは置いといて、このままこんなことはなしていても埒があかなさそうなので。

「家に泊めてくださるとうれしいです。」

「嫌だよ面倒くさい。」

「まさかの即答っ！？」

こっ、この青年には人情というものが備わってないようだ。仮にも女の子を見捨てるなんてひどい。そんな私の軽蔑するような視線に気が付いた青年が、さらに人でなしな言葉を吐き出した。ちっ、も

つと縋るような視線を向ければよかったかな。  
・・・同じ結果になるような気もするけど。

「だってさ、よく考えてもみなよ。君、いきなり知らないどこの人間かもわからない不気味な人間にわざわざ手差し伸べる人がいると思う？少なくとも俺はそんなやついないと思うけど。」

「・・・不気味って私の事っすか。」

「ほかに誰がいるのさ。」

どうしようこいつ本当にム力つくんだけど。殴りたい。そのお綺麗な顔面殴り飛ばしたいで、羨ましいくらいサラサラな薄い青色みたいな奇妙な髪の毛りたい。・・・というか、今まで突っ込まずにいたけどそんな髪色してるお前の方が不気味だと思うぞ。コスプレデスカ？因みに目も青色。・・・外人さんデスカ？まあ、外人さんなら目が青色でも不思議はないけど。なんでこんな日本語ペラペラなの。そんな容姿に恵まれていて尚且つ頭もいいとかだったらマジ殴り飛ばす。

私はそんな設定二次元しか許しません！！

あ、話が反れちゃったね。とりあえず元に戻そうか。

「貴方に言われたくありません。それに、世の中は広いんです。そつと何も言わずに手を差し伸べてくださるお優しい方々だっているはずです。」

「じゃあ君が俺の立場だったら何も言わずに手を差し伸べるの？」

「差し伸べるわけないでしょう。」

「・・・・・・・・・・」

即答してやった。そしたら青年は微妙な顔をした。どうだ参ったかさすがにあの流れでそう答えるとは思わなかっただろう。ザマーミ

口。ハハハ。

・・・こほん。

「まあ、相手にもよりまずけどねえ。子供や老人や・・・お淑やか  
そんな女性なら、多分手を差し伸べるくらいはしますよ。」

「ふうん・・・。」

「なんですかその疑うような眼は！」

「・・・いや、俺ならたとえ君が５歳くらいの子供だったとしても  
絶対にそんなことしないよなーって思っで。」

「それはそれは・・・最低だな。」

「ぼそつと言っでも聞こえてるから。」

「いや本当の事ですし？」

「・・・・・・。」

「もうそんなあなたの事情なんてどうでもいいですから、さっさと  
諦めて私をあなたの家に連れて行ってください。本当に自分でもど  
うなってるのか状況がよくわからなくてヤバいんですよ。」

「の割には全然そういう風には見えないんだけど。」

「当たり前じゃないですか。そんないつまでもいい大人がめそめそ  
していられませんよ。」

「というかあなたみたいな人の前でなく程愚かじゃありません。と、  
いう言葉は飲み込んだ。これじゃ売り言葉に買い言葉になっでしま  
う。もう遅い気もするけど、きつとそれは気のせいだ。私は速やか  
に泊めてほしただけなのになんでこんなに苦労しなきゃいけないん  
だろう。せめてもっと人情溢れる優しい人だったらなあ・・・。」

私は、青年にばれないように、そおーっとため息を吐いた。その時、

「・・・ま、君面白そうだし。今回は特別に城に泊めてもらえるよ  
うに交渉してあげる。」

「・・・えっ」

「俺に迷惑かけたら即刻追い出すけどね。」

天使様が舞い降りた。後に聞こえた物騒な言葉は気にしない。でもちよつと待てよ。

「……しろつて言った？この人。なんで。そこは百歩譲つても屋敷だろう。その言葉を理解していくうちに、だんだん自分の笑顔が引き攣つて行くのが分かった。やっぱこつて日本じゃない！？」

「し、城つてなんですか？」

「城は城だよ。そんなこともわからないの？」

うわーやっぱこの人ム力つくわあー。……一応恩人だから言わないでおくけど。

「ほら、私宿とかでいいんですけど。」

「俺に金払えつて？冗談じゃない。」

「……。分かりましたやっぱお城でいいです。もうどうでもいいです好きにしてください。」

「分かった。じゃあこつち来て。」

何を言つても無駄なんじゃないかと思ひ始めたのと、早くこの森から出たいという思いが数々の矛盾点への疑問及び青年の態度への反抗心に勝り、やや諦め口調でそういつた私に、青年は少しも動揺すること無くそう促した。

なんでわざわざ彼の隣まで行かなければならないのかと思つたが、私は元来あまり物事を深く考えない性質バカなので、この時もさして何を言つてもなく素直に従つた。うん、この私の性格のせいで昔から相変わらずトラブルに巻き込まれたりしてばかりなんだよねー本当学習能力無いからさ私。

……なんか自分で言つて悲しくなつてきた。やめとこう。そん

「ダイクメモリ」  
な黒歴史を掘り返すのは。

まあ、何が言いたいのかというと・・・。

「・・・っえええ！？うわっ！！！？」

「ちよっ、うるさいんだけど黙っててよ。」

いきなり元居た世界の常識ではありえない、魔法みたいなものでは  
たまたわけのわからんところへと飛ばされたのでした。だけど、そ  
れも一瞬の出来事。まさに瞬きする間に、私の目の前の景色は違せかい  
うものになっていた。

「え・・・ここ何処？」

「城のすぐ近くだよ。さっそく王に君のことについて許可おとし取りに行  
くから、ついてきてね。」

「はあ。」

・・・若干『許可取りに』の言葉が違う風に聞こえたのはきつと気  
のせい。むじろそうに違いない。そう無理やり自分を納得させて、  
私の目の前を歩く青年の後に続いた。無駄に長い廊下らしきところ  
を通る。本当に、なんでお城ってこんなに廊下長いんだろうね。い  
や、私お城に入ったことなかったけど。

・・・そもそも日本にこんな洋風なお城があるわけないしね。いや、  
偽物っぽいのならあるのかもしれないけど。

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

どうしよう。私こういう沈黙嫌い。マワリノクウキガオモイヨ。  
なんか話題。話題落ちてないかな。・・・考えてみれば、なんかか

んやで今日あったばかりだしそんなに話題がある方がおかしいことなのかもしれないけど。うゝん・・・。

・・・あ、そういえば話題あった！！

「あの。」

「何。」

「そういえば、私たち自己紹介してなかったですよ。ってことでお互い自己紹介しましょう。私の名前は青羽。意外と可愛い者好きで、甘いものも好き。因みに辛いものも好き。あなたは？」

「・・・カルロス。」

「・・・ちよつと、それだけ？」

「悪い？」

「いや別にそういうわけじゃないんだけど・・・。」

「何か言いたげだね。」

「・・・貴方絶対に友達少ないですよね。」

「まあ、俺には必要のないものだしねえ。」

「・・・」

駄目だこいつ。私はそう悟った。まず話題を振ってもそれを発展させてくれない。いやむしろ発展させようとしてもしていない。これは話題を振るだけ無駄かもしれない。

そんなことを思っているうちに、いつの間にか王の間っぽいところについた。・・・ちよつと違うか。うゝん・・・謁見の間？・・・

まあ、どうでもいいか。

そう思っていると青年、カルロスは何の断りもなく一見すると重たそうなドアを男にしては細めの腕で軽々と開け放った。意外とこの扉軽いのかな。意地でもカルロスが意外と強いんじゃないかなんて思わない。

「お、おお。カルロスか。いきなりどうしたのだ？」

「お久しぶり・・・って程でもないですね。少しお願いことをしたくて。」

「お、お願い事・・・とは？」

「・・・おい、なんか王様っぽい人めっちゃオドオドというかビクビクしてるけど。大丈夫なのかこの人。いやむしろ何をしたんだカルロス。絶対お前になにかされた態度だぞコレ。大丈夫なのかこの国！？どこかなんて知らないけど！」

ちよつと王様っぽい人を気の毒に思った。だからって助けたりしないけどね。こつちだつてこれからの生活がかつてるんだから。綺麗で優しいそんな王妃様とかなら助けたかもしれないけど。優しい女性には紳士的に接しなきゃね。

「はい。この子・・・青羽を、この城に住まわせていただきたいのですが・・・。よろしいですよね。」

そういつてにつこり笑つたカルロス。わあ、恐怖

「もももちろんだ。カルロスよ。アレック、案内してやってくれ。」

「承知いたしました。」

「ありがとうございます。おうさま。」

「い、いや・・・それでは、私は執務があるのでな。こ、これで。」

「はい。」

あ、偉い。これは私の勝手な偏見でただのイメージだったんだけど、王様ってなんだか働かないでぐうたらしてるだけだと思つてたのに。この王様はちゃんと働いてるんだ。これでそういつた理由が、本当に執務の為でなくカルロスから一刻でも早く離れたいとかだつたら

失望するな。というか怒る。そこは王様なんだからちゃんとしようよって。・・・まあ、少なからずその理由もあるような気がしないでもないけど。

というか、王様に押し付けられたアレックって人が可哀想に見えてならないよ。本当に可哀想に。カルロスなんか押し付けられちゃって。いい人だったらフローぐらいはしてあげよう。できただけど。

いやいやそれよりも！王様そんなに簡単に了承しちゃってよかったの！？私の身元とか何位も聞かれなかったけど・・・。そういうもののかな？まあ、私にとっては多分その方が都合がいいんだし・・・どうでもいいか。そんなことを思いながら、何を思うでもなく王様がいそいそとこの部屋を出ていくのを見届けた後、突然私たちの前にさっきのアレックと呼ばれた青年が立った。

「青羽さま。お部屋へ案内いたします。カルロスさまはどうなされますか？」

あ、結構な好青年。印象的な赤い瞳に、銀髪。ここの国の人達は髪とか目とかいろいろカラフルだなー若干目に痛いとか思ったのは私だけの秘密。カルロスよりも筋肉質で男らしいな。中身はまだ分からないけど。もしかしたら内心は泣いているのかもしれないけれど・・・あ、なんかまただんだん可哀想になってきたからやめとこう。

「俺は今日のところは部屋に戻るよ。一応青羽がどこの部屋になるか教えてくれる？」

「承知しました。」

そういつて一言二言話してから、カルロスは去って行った。ちょっと知っているひと（って言っても今日あったばかり）がいな



くなつて寂しい。・・・とりあえず今日のところはもう嫌味を言われなくて済むのかと安心して自分もいるけれど。でも、なんだからだでお世話になったっていうか・・・一応行くあてのなかった私を助けてくれたんだし、後でお礼言っておこうかな。さらりと流されそうな気もするけど。

「青羽さま。案内するので、ついてきてください。」

「あ、はい。分かりました。えと、アレックさん？」

「・・・敬語や敬称は必要ありません。」

「え？でも・・・」

「必要ありません。」

「・・・じゃあ、私のことも敬称とか使わないでくださいよ。」

「いえ、それは・・・」

「いいですね？」

につこり笑つてやった。因みに参考はカルロス。あそこまで迫力のある笑顔はさすがに作れないけど。

「・・・分かった。青羽。これでいいか？」

そうしたら、アレックも私に負けず劣らずの笑顔で・・・というか、妙に清々しい笑顔でそう返された。ちよつとドキツと来たのはきつと気のせい。

「う、うん。」

「顔が赤いぞ。俺に惚れたか？」

「そ、そんなわけないでしょ！！」

なんか急に軽々しくなつてない！？いや、ずっと畏まったままでいられるのはもつと嫌だけど。まあどうせならこういう友達感覚で話

せるほうがいいよね。そんなこんなで私たちは言い合いながらも、部屋へと向かった。

「ここがお前の部屋だ。」

「・・・デカいね。」

「城だからな。・・・それにお前は、カルロス様のお客人だ。」

客人とはちょっと違う気もするけど・・・。

「カルロス、さんってそんなに偉い人なの？」

「知らないのか!？」

「え・・・うん。知らない。」

それよりも気になったカルロスのことについて聞くと、すっごく驚かれた。今日会ったばかりなんだからしょうがないじゃんか。ここに来たのだって不可抗力みたいなものだし。

「はあ・・・。青羽、お前いったい何者なんだ？」

「ええ？何者って言われても・・・普通の人間だけど。」

「カルロス様とはいっ、どこで知り会ったんだ？」

「えっと・・・森の、湖のとこ。」

「・・・どこだそこは。」

「知らない。気づいたら森の中にいたから。」

「・・・そうか。」

・・・なんかものすごく可哀想な者を見る目で見られたんだけど。いや、自分でも自分が可哀想だとか思うけど。事故で車に轢かれたと思って、目が覚めたら全然知らないところにいたんだし・・・。うーん、今はそういうこともう考えたくないからやめておこう。アレックも深く聞く気はないみたいだし。

「まあ、何か聞きたいこととかあったら俺に言ってくれ。明日から俺はお前専属の使用人になると思うから。」

「なんでそんなことわかるの？」

「日頃王のそばにいればこの後どういう展開になるのかだいたいは予想がつく。」

「ふーん。そういうものなんだ。なんか大変そうだね。」

「大変に決まっているだろう。・・・まあ、カルロス様の傍よりはだいぶマシな方だろう。」

・・・何故かは聞きたいような聞きたくないような。でも怖いからやっぱり聞かなくておくことにした。聞かない方が幸せなことだっ  
てあるよね。そう思っ  
て私はそうなんだと返事して、今日一日中歩き回って疲れたこともあり早く寝ることにした。

そして次の日。

起きたと思ったら、傍にカルロスがいて思わず悲鳴と共に殴りそうになった。危ない危ない。って、いやいや問題はそこじゃなくて！！

「なんで勝手に入って来てるんですかっ！！」

「読んでも返事がなかったから。」

「なら、また後で来ようとかしてくださいよ！」

「ええ？なんで俺がそんな面倒なことしなくちゃいけないのさ。」

「・・・・・・・・」

ああ、疲れた。もう言い返す気にすらなれない。朝一番で体力と精神力をこれでもかかってくらいにそがれた私は、わざと大きく思いきり相手にも分かつように大げさにため息を吐いてから、何故ここにいるのかの理由を聞いた。というか本当になんでなんだろう？

「君はもう少しこの世界のことを知っておいた方がいいと思ったからさ。君の話を聞く限りじゃあ、君はこの世界の人間ではなさそうだしね。」

「・・・分かりました。そういうことならついていきます。支度とかしたいので、とりあえず出ていってくださいます？」

「はいはい。しょうがないなあ。」

「・・・もうどうでもいいですよ。とっとと出ていってください。」

やけくそにカルロスを外に追いやって、外に出る準備をした。クローゼットらしきところを開いたら、色とりどりのドレスが。・・・うん、服装は昨日と同じでいいかな。私にこんな煌びやかなドレスを着る勇気なんてありません！！それなら、多少目立ってたっていつもの服を着る！ってことで、昨日メイドさんから手渡された・・・その、ネグリジェっぽい寝巻を脱いで、傍に置いてあった服を着る。髪は適当にくしで解いて、カバンも一応持っていく。多分これ十分もかかってないな。女としてそれでいいのかという気がしないでもないけど、まあどうでもいいか。

「お待たせしました。」

「ああ、うん。・・・随分早いんだね。」

「そうですか？」

「うん。たいていの女性は30分以上かかるからね。まあ、俺としてはその方がいいけど。」

「はあ。まあどうでもいいですよそんなことは。早くいきましょう。」

「私もご同行してもよろしいでしょうか？」  
「っえ？」

突然聞こえた声の方を向くと、そこにはアレックがいた。すごい。気配も何もなかった。まあ、気配がわかるほど私すくもないけど。いやいやそれより、いきなりどうしたんだろう？カルロスも疑問に思ったらしい。アレックに何でと聞いた。

「私は青羽様専属の使用人です。青羽様のお側にいて、護ることが私の仕事ですので。」

「そこは俺がついているから何の問題もないはずだけど？」

「いざというとき、カルロス様御一人では対処しきれないことも御座います。」

「それは俺に喧嘩売ってるの？」

「そういうわけでは御座いません。」

うつわぁ～なんか・・・修羅場？加わりたくないなぁ。なんて思っていたら、いきなりアレックに話を振られた。

「青羽はどう思う？」

「・・・っえ？」

「ついていてもいいか？」

「私は別に構わないけど。いいんじゃない？人数は多い方が。」

「・・・随分仲が良いんだね。」

「そうですか？」

「・・・。。。。。。。」

あらら。黙り込んだじゃったよ。何かいけないこと言ったかなあ？

「・・・まあ、いいよ。わかった。さっさと行って終わらせてこよ

う。」

「有難う御座います。」

「……別に。」

まあ、約一名不服そうな人もいるけど、私達はカルロスの移転の魔法で街へと行った。魔法って楽だけど運動不足になりそうだね。と、歩いて行く気満々だった私は密かにそう思った。

「んで、まずはどこに行くんです？」

「どこか行きたいところとかはある？」

「いえ……まず、どこに何があるのかすらわかりませんし……。」

「……では、人が多く集まる密集地帯へと行かれは方がよろしいかと思います。」

「じゃあ、まずはそこからね。あそこは安易に魔法も使えないから、歩いていくよ。」

「魔法が使えないところもあるんですか？」

「うん。まあ……面倒だから、説明は現地についてからにしようか。」

「分かりました。」

そうして私とカルロスとアレックの三人ははぐれないように気を付けながら歩き出す。今私たちがいるところも町だそうだ。技術とかそういうものはあんまり発展していないみたい。でも、私的には活気があっていいと思う。日本は住みやすいけど、空気とかは悪いらね。……ああ、でもやっぱり住み慣れたところが一番かな。

「もうそろそろ着くよ。」

「あ、はい。・・・って、もしかして、あれですか？」

「そうだけど。どうかしたの？」

「いえ・・・ちよつと、私の住んでいたところに似ていたので。」

「そう。じゃあ、何か調べてみればわかるかもしれないね。俺もそんなに暇ってわけじゃないし、それはまた今度になるけど・・・。」

「そうですか・・・。でもまあ、何も収穫がないよりかはいいですよ。ありがとうございます。」

少し遠くに見える高い建物。そう、そこは私の住んでいたところ・・・つまり、日本の都会とあんまり変わらないところだった。なんだか懐かしいなあ。まあ、あくまで遠くから見た感想だから、中身はどうなってるのかは分からないけど。もしかしたら全然違つかもしれないし。似すぎていても逆に怖いよね。

そんな都会な場所には、約十分ほどで着いた。

「私は手続きを済ませてまいりますので、少々お待ちください。」

「分かった。よろしくね。」

ああ、私の知ってる都会じゃない・・・。それは、近づけば近づく程に明らかになっていった。たった一つ、門番らしき人が立っているところの扉からしか入れないらしい閉鎖された世界。同じ都会でも、ここより日本の方が断然いい。まあ、こういう体制をとっているのにも、なにか理由があるのかもしれないけど。そんなことを思っていると、隣から声がした。カルロスだ。

「・・・ねえ。」

「なんですか？っていうか、近いですよ。離れてください。」

「その敬語嫌なんだけど。」

「・・・はい？」

「だから、敬語やめてって言うてるの。君はいちいち確認しないと分らないの？」

「・・・そんな嫌味なことばかり言うと、一生敬語で話しますよ。」

何なんだ突然。この人はいつも・・・って言えるほど、過ごしてもいないけど、とにかく唐突だ。そして片時も嫌味を忘れない。いやこれはもはや・・・癖？  
だとしたらもう救いようがない。

「・・・君って、頑固だね。」

「そんなこと言われたことありませんけど。」

「そう。だとしたら、周りの人の優しさに感謝することだね。」

「・・・。。。。。」

というかそれカルロスにだけは言われたくないんだけど。それに、私がこういう態度をとるのはきつとこいつだけだ・・・多分。まあ、周りの人たちが優しいのは否定しないけど。皆、なんかいつもほんわかってしてたからなあ。まあ、ここは心を落ち着かせて平和的に解決しよう。

「そうですか。もうそれでいいですよ。あ、ついでにあなたに対しての敬語はもう一生変わることはないと思います。・・・敬つてるわけではないですけどね。」

って、だめだだめだだめだ！！これじゃあどつちかというと売り言葉に買い言葉ではないか！・・・ああ、私多分この人に毒されるよ。どんどん皮肉な発言しかできなくなっていきそうな気がするんだけど・・・。そうぞうしただけで怖い。それじゃあ、あの縦社会では生き残れない。



「すみません。言いすぎましたね。謝ります。」

だが敬語はやめない。今更やめられない。私のなけなしの意地とプライドにかけて！

なんて、妙にそれたことを考えていると、突然カルロスの顔が近づいてきて……。

「俺の方こそ悪かったよ。ごめん。でも、やっぱり敬語はやめてほしいかな。」

なんて言葉と共に、頬にキスが降ってきた。犯人はもちろん……カルロス。

「~~~~つてめえ、ぶつ殺す!!」

「あ、敬語とれた? っていうかなに、こういうのもしかして初めてだったんだ。」

「……………っ!!!!!!」

もはや言葉すら出ない。もういい。こいつに遠慮や敬語は必要ない! なんかうまく誘導されたような気がしないでもないけど、もうやっぱ敬語にしておかわれても絶対にそんなの聞いてやるもんか!! そのことで精一杯だった私は、カルロスが頬にキスをするとき、ちようどこっちの方を向いていたアレックの方を向いて厭味ったらしくにやりと笑ったことになんて気づかなかった。

そして、アレックが手続きを済ませてくれたので、私達は都会へと

足を踏み入れた。・・・思った以上にそこは凄かった。これはもしかしたら私の知っている世界の何処よりも凄いかもしれない。何て言うか、近未来的な？

・・・違うか。まあ、ご想像にお任せすることにします。

「なんか・・・凄いとしか言いようがないね。こういう所はここだけなの？」

「いや、そういうわけではない。数は少ないが・・・他にもこういう所はあるぞ。」

「でも、やっぱり一番大きいのはここだけだね。」

「ふうん。そうなんだ。」

だからここに来たのかな？（カルロス）移転魔法で来たから、どれくらい遠いのか分からないけど。

「それで、どこに行くの？」

「揭示広場。・・・まずは、ただだね。そこが一番ちょっとしたこの情報が集まりやすいから。」

「そんなところあるんだ・・・どこら辺にあるの？」

「この密集地帯のど真ん中だね。」

「・・・それ、結構遠くない？」

見ただけでも、ここの土地の面積はすさまじく広いのに・・・というか、揭示広場そこしかないのかよ！！なんかここはいろいろ発展してるなあと思ったけど、不便な面も多いのかな・・・。

「まあ、遠いけど。魔法で行くわけにはいかないしね。」

「そつえばまだ聞いて無かったけど、どうしてここでは魔法とかが使えないの？」

ちょうどいいから今ここで聞くことにした。ここ魔法がないわけじゃなさそうだし。だって普通に空にありえないものが浮いていたりしてるよ。わあ不思議。

「魔法が使えないわけじゃないんだよ。ただ使わない方がいいっていうだけで。」

「どうして？」

「この空間には、常に魔法の回線みたいなものが巡っているんだよ。だから、この近くで魔法を使ったらその回線が乱れてしまうことがあるから、無闇に使えないんだよ。分かった？」

「まあ、なんとなくは……。」

分かったような分からなかったような……。とりあえず、あんまり難しいことは考えすぎない方がいいと思うからこのことについて考えるのはやめた。まあ、あれだよな。雷が落ちて停電になってしまいました的な状況になるってことだよな。うん、私の説明ってわかりやすい！多分ね。

はい。まあ、そんなこんなで、私たちは掲示板広場につきました！すっごい人が多い。私の知っている都会（いわゆる東京）なんて目じやないほどに。

大きな噴水の湖の周りに、たくさんの掲示板。因みに、広場を囲う様にしてこれまた膨大な数の掲示板。掲示広場って言ってたの思わず納得してしまいそうなほどの量だった。

確かにこれだけ情報が詰まっていれば何かしらの手掛かりはつかめ

るのかもしれない。でもさ、でもだよ？

・・・これだけの中から、どうやって探していけっというのさ・・・

正直言つて、ひと月かかっても全部読める気がしないんだけど。

「・・・こんなの、どうやって探していけばいいの・・・」

「そこは大丈夫だ。ちゃんとこの情報をすべて管理しているものがあるからな。」

思わず独り言を呟いてしまったけど、律儀にも其の独り言をアレックが拾ってくれて答えてくれた。ていうかこれだけの情報・・・しかも、誰もが適当にいろいろ書いていけるのに、どうやって管理しているんだか。少なくとも、私の常識の範疇では収まらないような気がするんだと。

「どこに？」

「あそこに。」

「・・・あの建物？」

「ああ。」

そういつてアレックが指差した場所は、広場を囲う様にしてたっている大きな建物。どういう建物なんだろうとか広場に入るとき思ってたけど、そういうことだったんだ。いや、だとしてもこんなのどうやって管理するのだろうか。ネット上のものでもなさそうだし・・・どうしても気になってしまったので、聞いてみることにした。

「ん？・・・ああ、魔法で管理してるんだ。魔力の弱い人には見えない魔法だね。」

「ふうん？よくわからないけど、魔法つてやっぱすごいねえ。」

うん。やっぱりよくわからなかった。だからもう諦めるよ。現代っ子でしかも技術が発展した国で生まれ育った私には魔法ってよくわからない。

「アレックは見えるの？」

「いや、俺はそこまで魔力が高いわけではないからな。見えてはいない。・・・それに、それが見えるのなんてカルロス様や限られた方々ぐらいだ。普通は見えないものなんだ。」

「じゃあ、管理されてるってこと、ここにいる人たちは知ってるの？」

「ああ、それは周知の事実だからな。だが、何を書いても絶対に何も言われないから、どんなことでも皆書くのに躊躇ったりはしていないな。」

「そうなんだ？」

「そうだ。ただ管理されているってだけで何を書いても許されるかな。」

「ふうん・・・それが犯罪的なことでも？」

「ああ。」

・・・なんか変なの。いや、でも言わないだけで秘密裏に有効活用されているのかもしれないし・・・。あんまそいうことって首突っ込まない方がいいよね。

ってことで、この話題はこれで終わらせることにした。

「とにかく、難しいことは考えない方がいいよ。余計にこんがらがるだけだからね。話している暇があるんなら早くいくよ。」

「承知いたしました。」

「・・・分かった。」

多少カルロス言い方に不満はあったものの、若干慣れてきてしまったのと一々言い返すのも疲れるなと思ったことから、なにも言わないでおくことにしておいた。アレックも何も言っていないしね。まあ、様子を見ている限り言える立場でもないんだと思うけど。

「うわ、中もすごいね。」

「そりゃあどうでもいいことだらけとはいえ、あれだけの情報を管理しているところだからね。・・・少し大げさな気もするけど、そこは気にしたら負けだよ。」

何に負けるんだろう、とか思ってしまったが、私もカルロスと同じようなことを考えてしまっていたので口にはもちろん出さない。そこまで私馬鹿じゃない。なんだか何言っているのか分からなくなってきたけど・・・うん、あれだよ。気にしたら負け。

「んで、これからはどうするの？」

「自分たちでほしい情報を探せる部屋があるから。そこで探しているつもり。こっちきて。」

そうして私たちが入って行ったのは、三階にあった検索室というところ。そこにはたくさんパソコンが置いてあった。

・・・うん、パソコンだ。結構違うところもあるけど見た目はだいたい同じ。文字を入力するところが違うだけかな。指で自分で文字を書いて入力していくらしい。しかも画面タッチ機能が・・・このパソコンらしきものの結構いいかも。面白そう。

ずらーっと並んでいるといっても、一つ一つ仕切りのようなもので区切られているから、他の人から見られる心配はなさそうだね。・

・まあ、そもそもそこまで人いないんだけれども。

私たちは、それぞれで手分けして調べることにした。

「ここをこうすればできるから。」

「ん、分かった。」

カルロスとアレックに一通りやり方を教えてもらい、隣にあってある文字表を見ながら文字を書いて打って行く。なんかぐにやぐにやしてて変な文字だな。因みに、この世界には何語とか何文字とかないらしい。国とかいう概念がないっていうか・・・まあ、ある意味言葉の壁とかに困らなくていいと思うけど、日本人な私にはものすごい違和感。

まあ、そんなこんなで、振り分けられたキーワードを入力してく。

まずは・・・『禁断』。

うわあ、なんか危険な香りが・・・。なんでも、この世界ではいくつかの禁断の魔法みたいなものがあるらしくてね、異世界召喚というものもギリギリその禁断の類の枠に当てはまるらしいよ。ま、あくまでギリギリだから、そこまで重要視はされていないみたいなんだけれども。

いやいやそんなことより、検索結果。んー五十件くらい・・・？読むの大変そうだな。ああ、でも自分のことだし、頑張らなきゃだよな。

いまいち気合が入らないまま、私はディスプレイをスクロールしてみていった。

《なんか最近妹が禁断の恋とやらに目覚めたらしいんだけど・・・  
どうしよう》

・・・まあ、頑張れ。

《　　＜禁断の果实＞　　　これで貴方の人生変わります》

どうでもいいわっ！！

《男性同士の禁断のこゝ「げほっ、ごほっ。」

「どうした？」

「な、なんでもないっ」

なんちゅーもん書いてんだああああっ！！！！

さすがの私もこんなところで注目は浴びたくなかったので、心の中で叫んだ。若干息が切れている。だっていくら書いてもいいって言ってもこんなこと普通は書かないでしょ。こういう神経してるのこの人たち。

やめよう、一旦落ち着こうよ自分。と、とりあえずここに私の求めている情報はなさそうだから、次行ってみようかな。

次のキーワードは『異世界』。うん、これは妥当な考え方だね。やった本人（いるかもわからないけど）が、異世界のもの目的でやったことだとしたらやっぱりこのキーワードが一番ありそうな感じ。

《もう嫌だ、人生疲れた。異世界行きたい・・・》  
人生諦めたらそこで終わりなんだぞー。



《そもそも話異世界ってあるのかな・・・？》  
在るぞ。私がいい例。

《誰か異世界の召喚魔法できる人いませんか？・・・いないよね》  
おい、なに自問自答してんのこの人・・・。

・・・で、これはなんだか求めているのに近い感じ？  
もしかしたらあたり？  
ちよつとどうしても気になってしまった私は、隣に腰かけて調べているアレックに聞いてみることにした。

「ねえ、これはどうだと思う？」

「・・・可能性はあるかもな。調べてみるか。」

「どうするの？」

「筆跡を調べるんだよ。」

「・・・筆跡？どうやって。」

「見ていればわかる。」

「・・・おおー！すごいねこれ。便利。」

アレックが操作しているうちに、あっという間に筆跡から書いた人の個人情報が出ていた。今はプライバシーの侵害とか考えないでおこう。ここでは通用しないような気がするから。

そして数時間後。やっとだいたい調べるのが終わった。

結構な時間がたったのに、お昼。どうやらこと向こうの世界の時間軸は大幅に違うらしい。ま、いまさらそんなことで驚いたりないけどね。

「結構集まったね。」

「うん。んで、今からこの場所全部行くの？」

「そう。まあ、ここから出れば魔法なんて使いたい放題なんだから、すぐに終わると思うよ。」

そんなカルロスのお言葉通り、この密集地帯の扉を出てしばらく歩いたところで、カルロスが移転の魔法を使い、調べ上げた多くの場所へ行くのにそんなに時間はかからなかった。

十何か所が行ったところで、やっとちよつと関連がありそうな所へとたどり着いた。

・・・というか、向こうからやってきた。

「ごめんなさい・・・。」

「・・・・・・っ」

え・・・どんな状況かって、目の前に現れたべらぼうに可愛い男の子がことの首謀者らしく、ずっと一人で暮らしていて寂しかったから、誰でもいいから話し相手が欲しくてやってしまったことらしい。因みに名前はフィストというらしい。素直に謝って来てくれた。身長的には中学生と高校生の間っぽい。でも可愛い。本当に可愛い。抱きしめたいくらい可愛いっ。

「・・・で、君は許すの？」

「まあ、そういう理由なら仕方がないですよ。元の世界に帰してくれるんなら許しますよ。」

「「「・・・。。。」」」

え・・・ちょ、なんでそこで皆黙るの？・・・なんかすごい嫌な予感がするんだけど。

「えーと・・・それが・・・。」

「ま、まさかもう帰れないとかいう気じゃないよね!？」

いくら可愛くてもそれだけは許せん「ごめんなさいっ」・・・

負けるな、私。しゅんとしている姿もとてもなく可愛くてもものすごく同情心をあおるけど・・・そ、それとこれとは問題は別。そもそも私こんな世界で生きていける気がしないんだけど。

「お願いだから、ちゃんと言ってよ。」

「僕が使えるのは召喚魔法だけだから・・・元の世界に戻ることはできないんだ。」

「・・・ま、もともと召喚魔法でさえすごく高度な魔法だからね。

送還なんて今もほとんど謎な魔法だし。できたとしても、元居た場所に戻ることは難しいと思うよ。」

「そんな・・・。カルロスはできないの？」

「俺の専門はそっちじゃないから。得意じゃない魔法をやるうとしても失敗するだけだよ。」

「・・・アレック・・・。」

「・・・助けてやりたいのはやまやまだが生憎俺は魔法はほとんど使えない。悪い・・・。」

駄目だ。ここに頼れる人いない。このままじゃ私力エレナイ・・・。

「・・・ま、何かあったら協力するから、それまではずっとこの

世界にいればいいんじゃないかな。」

「ああ。その方が俺としても嬉しい。・・・青羽、何かあったら俺に頼れ。できる範囲の事なら、なんでもしてやる。」

「それなら、ずっとこの屋敷に住めばいいよ。生活は保障するからっ！」

そんなことが聞こえたような聞こえなかったような・・・。とにかく、私の旅は再び振り出しに戻ったのでした。

「・・・よしっ！ゼーッタイに送還の魔法使える人を探して見せる！！！」

そして本当は送還魔法がありふれたものだったなんて私は死ぬまで知らずに生きてゆくのでした。

さらにそして、私が三人から猛烈なアタックを受けながら若干軟禁された生活を送るのはもう少し先のお話

『事故にあった私は異世界にて、もとの世界に帰る方法を探し続けたと思います。』

元の世界の青羽はもう故人なんて誰も知らない。

(後書き)

なんか主人公報われてない・・・？  
・・・ま、いいかw w

気に入られた方はお気に入り登録おろしくオネガイシマスっ！！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0164z/>

---

事故にあった私は異世界にて

2011年11月30日21時46分発行